

2023年 映画の旅

映画、それはアメリカで始まった20世紀最大の文化、最強の大衆娯楽である。発明当初から人々を魅了してきた映像技術は100年以上発展を続け、今なお大衆に影響を与えている。今号ではその映画に迫ろう、などとでかいことを言ってみたいが、100年以上、星の数の人間が関わってきた映画という一大文化について高校生が迫れることなどはっきり言っていたかが知れている。映画の世界は果てしなく広く、深いのだ。これはあくまできっかけで、読了後の読者の方々が映画への好奇心を膨らませてくれることを祈る。()



映画とは何だろうか。そんなことを聞かれたってそう簡単には答えは出ないと思う。なぜなら、この問いは哲学的な要素を含んでいるからだ。哲学は難しいものであるというのが一般的な考えだろう。だが、よく

考えてみてほしい。メガネが本体だと言っている人もいるが、これも哲学なのである。では、そもそも哲学とは何か。『映像の歴史哲学』によると、知のあらゆるものを統合した世界で、専門領域をもたないということの中にこそ哲学の世界があるらしい。難しくすぎてよく分からないので、自分なりに、哲学とは何かを考えてみた。哲学とは、その人個人の持つ悩みの種や喜びについて考えることだという結論に至った。日常のぼんやりとした疑問や小さな喜び、悩みの種の重さや内容など人それぞれである。だから、哲学には一つとして同じものはない。自分事ではなく、他人事として捉えてしまうから難しいとかよく分からないと感じてしまうのだろう。これは仕方ないと思うが、だからといって、哲学と縁を切ることは不可能なのである。先程も述べた通り、哲学とはその人個人のもつ悩みの種や喜びについて考えることである。つまり、哲学は日常のあらゆるところに隠れ潜んでいる。私たちは、すでに哲学となりうる種を持っているのかもしれない。

これを踏まえて、映画とは何かを考えていこう。まず、映画についての思い出や好きな映画のジャンル、誰と行くかなどを自分の中で思い返してみよう。もちろん、映画に対する不満や失敗談などのネガティブなことでもいい。映画泥棒に想いを馳せるのもいいだろう。次に、自分にとって映画がどのような存在なのか考えてみよう。娯楽としての映画なのか、別の何かなのか。それらを考えれば映画とはなにか、自ずと答えは出るだろう。

今回、自分なりの見解をもったことで、映画の見方が変わるかもしれない。きっと、今まで気づけなかった映画の魅力の虜になることだろう。それが哲学の本質と言えるものなのだろうか。先程、自分で哲学は難しくないと云ったが、考えれば考えるほど哲学というのは複雑になっていく。そんなときは、映画でも見て現実逃避をしよう。() *1



CGの融合が成された映画は、昨今急激に多くなってきているのではないだろうか。

そんなCGを利用した映画において大切にされていることは、主に『アクション映画さながらの高画質』と、『現実世界に引けを取らない複雑さ』の二つだという。元々この世界にないものを、まるで今そこにあるかのように見せるには、その二つが必要不可欠である。CGを映画に導入した制作陣は、何十年も前からその二つを追求し、その完成度を高めていったのだそう。

『アクション映画さながらの高画質』というものには、周りに同化したり、現実味のある滑らかな影を表現したりすることなどが挙げられる。現実世界で撮られてきた映画を空想の世界で再現するには、一本撮るだけでも多くの技術を要するアクション映画が一つの目標となった。『現実世界に引けを取らない複雑さ』も似たようなものである。数々の物で溢れている現実世界は、物の一つひとつに形があり、我々が何にもふれていない時間はない。そのように四方八方にちりばめられた情報の多さを、どれだけ緻密に再現できるのかというのが大切になってくる。

『現実』にいかに近づけるか。CGという、あらゆるものがフィクションででき上がったエンターテインメントを、どれだけのものにするのか。制作陣は何かがあっても、画面の向こうの熱狂を覚ますわけにはいかない。現実と仮想を行き来しながら、理想の世界は創り上げられていく。*2 ()

らいぶ らりい

札幌市豊平区月寒東1条3丁目
北海道札幌月寒高等学校図書局

編集:



目次:

映画とは
画面の中の現実
おすすめ本

.....1P

How To create a Movie.
THE MONEY
映像機材の原点とは
映画館の軌跡 ~北海道~
月高生に聞く!

.....2・3P

映画字幕
広告
End Roll
芸術

.....4P

おすすめ本



『映画を早送りで観る人たち』 稲田豊史／光文社新書

「映画を早送りで観るなんて、一体どういうことなのだろう」。倍速視聴が一般化した現代、映画というコンテンツが現代人の多忙な日々の中で消費されていくことに対して筆者が感じた疑問。筆者はその疑問を解消するためにモニター調査やインタビューを行い、なぜ早送りをするのかを考察していく。

本文冒頭の一文は、実はこの本の最後の文から引用している。つまり、最後まで筆者はこの疑問を完全には解消できなかったということだ。

ここからは私の考えだが、この話は価値観の違いであり、どちらが正しいとかそう言ったことではないのだと思う。これを読んでいる皆さんも、賛成・反対に意見が分かれていることだろう。私は映画を早送りしない派として、早送りで見ると人たちの意見に驚かされていた。もちろん早送りをするという人にも、早送りを疑問視する筆者の意見は新鮮に映ると思う。この本を互いの視点を覗くための道具として、ぜひ皆さんには映像作品の鑑賞の仕方を考えてみて欲しい。() *3